

# 在宅サービスの新たな拠点



## 「直江津介護センター」開設

去る三月一日、さくらメディカル(株)では、上越地区における在宅サービスの新たな拠点を目標として「直江津介護センター」を開設しました。当センターは、国道18号線と8号線がぶつかる

交差点から少し海側の春日新田二丁目であり、上越北消防署様の隣です。「さくらメディカル(株)直江津介護センター」の大きな看板が目印です。さくらメディカル(株)

では、平成十二年四月の介護保険の導入と同時に、介護保険サービス事業所(訪問介護・訪問入浴介護・福祉用具貸与)を開設し、介護サービスを必要とされる地域の皆さま一人ひとりの豊かで落ち

着きのある生活の実現を目指してきました。

また、介護サービスを必要とされる皆さまのご

### 居宅介護支援目標

私たち さくらメディカル 居宅介護支援事業所は 利用者様本位にその人らしい 尊厳のある生活が実現できるよう 自己研鑽に努力し 愛(パワー)・思いやり・感謝の 気持ちを忘れずに 利用者様を大切にいたします

### 直江津介護センター

〒942-0061 新潟県上越市春日新田 2丁目6-25 TEL 025-539-0855 FAX 025-530-9030

### 元気な町・地域の皆さまとともに



支援目標を壁に掲げ、張り切る職員たち

相談の窓口となる居宅介護支援事業所につきましても、平成十三年五月に「介護センター」(上越市鴨島)を開設し、上越地区の皆さまが住み慣れた家でご家族とともに心おだやかに暮らすことができるように活動してきました。

### ざいたくの風

世の中は複雑を極めてきた。人間として生き抜こうとするのに自立自尊の観念がときには崩れそうになる。高齢者も若い人たちも、立場は違ってもそれぞれ悩みを抱えて生きている▼合併を実施したある企業、大きくなった組織の中で取り残された心を病み、長期休職者が口説いているのを耳にした▼ケアマネ、ヘルパーの世界でも論外ではない。一人ひとり利用者さんの違う個性に合わせて行くため、時にはキレてしまい職場を放棄、ついには病気になる人もかなりいるという。幸い彼岸のこととして当社には事例は少ない▼これを称して、『燃え尽き症候群』と呼ぶ。どこにでもある、いわば人間世界の日常的な病なのであるか▼ふと、これを症候群のうち処置していくためには上層部の包容力が必要となってくるのではないかと考えた。市内に数人しかいない『主任介護支援専門員』の役目が希少価値と同時にその手腕を振るうときでもあると思っ

ここ上越地区におきましても、年々、高齢者の人数が増加し、それに伴って、介護サービスに関するご相談が増えてきています。特に、直江津方

### 地域の声を「かたち」に 心豊かな生活の実現を目指して

面の皆さまからは、以前より、「もっと身近なところに気軽に相談できる居宅介護支援事業所がほしい」との声を数多くいただいています。当セ

ンターは、このような地域の皆さまの声にこたえて開設され、この地域で暮らしておられる皆さまとともに、住み慣れた家や地域での心豊かな生活の実現を目指しています。

開設して間もない事業所ですが、玄関横の小さな花壇には、かわいらしい花が咲きはじめました。また、街の賑わいを感じられる事業所の中には、陽光が差し込む明るい相談コーナーもあり、主任介護支援専門員をはじめ四名のスタッフが皆さまのご利用・ご来所を心よりお待ちしております。港町でもある直江津のこの地域は、昔より「お祭り大好きなとても元

気な町」と言われています。私たちスタッフ一同も、ここで生活されている皆さまと同じ気持ちになつて地域に根ざし、一人ひとりとの出会いを大切にしていきたいです。また、ご利用される皆さまの尊厳を最優先した支援を心がけて、皆さまが安心して生活していただけるように元気にがんばりますので、どうぞよろしく願います。

た(泰)

昭和二十年生。県立妙高病院の医師だった内藤哲雄氏は、昭和六十二年八月のバイク事故で脊髄損傷となり首から下が不自由。現在は上越市春日山町の自宅で娘夫婦、孫と同居。その医師が事故の状況と重症のリハビリ生活から脱却、仕事への期待と情熱を語って下さった。

インタビュー

元県立妙高病院医師 内藤 哲雄さん

事故への陥穽(落とし穴)

まったくの自損事故でした。

当時の国道18号線は行

楽帰りで渋滞してほとんど進まない状況でした。バイクで走っていた僕は路側帯をゆっくりに進んで行きました。(新道路法規ができて今は二輪も路側帯を進まず待っています)

交差点に出ると青信号なのに普通の車両は渡れませんが、バイクは路側帯を進めばいいので、青信号のまま渡れます。いま思えば、これが驕慢と事故を起こした陥穽(落とし穴)でした。

ボクはふと思いつきました。信号を斜めに渡って右側の対向車線に進もう。左の路側帯なら進行方向の同じトトロ口運転ですが、今ガラガラの右車線なら対向車が見える

まで飛ばしていきける。そう思ってしまったのです。二輪は加速がいいので

加速して無理に追越して左車線に割り込みました。正面衝突の事態を何とか逃れたものの間近に迫るガードレールとの衝突が



ふたたび春が...

今、医師としての

仕事が出来たい!

忠実で、信頼していまし

たから……。

障害者という世界

そこから先は全く闇でボクの意識が戻ったのはその夜の中央病院X線室でした。ゲーゲー吐いている時で、吐いたのは、造影剤のためでしょう。脳は異常ないが、第四頸椎が折れていました。当然、頸椎に保護されていた第四頸椎も潰れています。脊髄損傷です。

ボクみたいに食事やパソコンで困る場合もあります。脊髄損傷と同じ呼び名で病状が多彩なのは脊髄という組織の複雑な構造によるもので、それだ

けに各人がいろいろ工夫して多彩な生活を営んでいると思います。自助器具がいい出来で食事とパソコンは意外に楽にいけます。困るのは排尿です。膀胱訓練してみたのですが、起座位で排尿するまでが精一杯で、臥床中に楽に排尿できるまで至りませんでした。そのため導尿して睡眠をとる生活を続けています。ボクは娘など周囲の負担と自らかなりのストレスを承知した上で、夜間の導尿と日中の自力排尿の繰返しを続けていますが、この辺は障害の程度にもよるので色々ですね。

脊椎シヨック 期という脊損に伴う症状のきつい病期間も経験しました。今は肩の筋肉が多少とも動きま

速度を上げて渋滞車両をどんどん抜いて行きました。緩やかな下りで、左へやはり緩くカーブしています。この辺、全条件が事故への呼び水でした。これに誘い込まれたのは自分が愚かだったのです。対向車を見たときには、自分の車線にトラックやトレーラーが続いていて割り込みにくく、さらに

もう詳細に覚えていませんが、懸命にブレーキを掛けながら衝突したと思います。というのは普段も急制動の練習など緊急時への訓練を続けていたと自負しています。自損事故を起こしたの口幅つたいようですが、最後までベストを尽くせという二輪のテキストには

去年の春まで九年間、新潟県立高田盲学校(平成十八年三月で新潟盲学校との統廃合で閉校)で講義してたんですよ。最初、講義を頼まれた時の校長先生のお話では、鍼灸の国家試験における医学知識のむずかしさに

困っている、と言うことでした。鍼も灸も、治療する目的のためとはいえ体に侵襲を加えますから、鍼灸師にそれ相応の医学知識が要求されても当然でしょう。でも、それを学ぶ側にすれば三〜六年の学校生活

でマスターし、国家試験に合格するため大変な勉強が必要なんです。しかも医学は門外漢が飛び込んでみると意外に無味乾燥で、面白くない



娘夫婦と孫と。4人家族の生活は宝もの



仕事への意欲はメラメラ燃えて

世界なんです。ボク自身、学生時代、そんな意味で辛かった覚えがあります。生きていく人間や生活に結びついてくるからこそ、知識や技術が面白いんで、それ抜きの抽象的な話は退屈だし、苦痛です。

例えば親父が医者で、仕事する父親に接してて心配そうな患者や家族の表情を見た経験があると、医学の勉強にも真剣さが違ってくると思うんで

す。逆にボクは国家試験までの勉強が味気なかった。むしろ仕事に就いてから医学の勉強に熱が入ってきたのを覚えています。そんな意味で同級生の内でも開業医の子息たちを羨ましく感じていました。

盲学校で頼まれた授業テーマが理療総論でしたから、できるだけ楽しい雰囲気、医学の全体像を勉強させようとしまし

た。一面的でなく立体構造で医学の知識を吸収できる授業構成と言いますか。しかも生徒にさまざまな視覚障害があるわけで、教え方にも工夫しま

### 医師の仕事を目指して

す。そのため自分でも生徒に負けない程の量の下の数年間はホントに否応なく勉強させられました。貴重な収穫でした。

て、教えるという楽しさから離れると、今さらながら臨床医としての緊張感が恋しくも懐かしく浮かぶ思いを味わいます。そんな折、どんな縁か新しい仕事の声をかけてもらう機会がありました。

のは最高級のうれしさですが、唯一つ、家を離れて生活するのが不安でした。この幾年か、かなり重症な障害の身を（ヘルパーさんが入って時間的にずいぶん助けてもらっているとはいいえ）娘の献身的な介護に委ね、甘えできました。

と思います。生意気な口の利きようだと叱られそうですが、ボクは国立大の医学部を出ています。自分の力で入学し、卒業したように思い込んでいても、実際、医学部のボク等を教育し卒業させるごとに巨大な支出があつて、それ凡て、この社会が負担したはずです。身体がきく限りで自分を尽くすべきです。改めてそう感じます

## 映画『ふみ子の海』の原作者が執筆

春先に咳きか止まらず、喉にポリープがあるカモ：と気楽に受診した。内視鏡検査で、十二指腸にガンが見つかったのは、七十歳の壁に手の届いた三年前の夏のことでした。

手術まで内科病棟に入院して待つことになりましたが、痛くもかゆくも無い体です。隣のベッドに寝たきりのお父さんの付き添いに西宮の嫁先から帰ってきたという娘さんと親しく話をするようになりま

した。ご病人はそうとう重病らしく、ベッドで苦しうに体を曲げ、目をつむったまま盛んに咳き込んで流れるよだれをタオルで拭いていました。病人は私より四歳年上の桑取の人でした。上越市の民俗部会に所属してよく桑取へ調査に出かけていた私は、枕元で娘さんと桑取のことなど話していますと、突然病人が目を開けて

帳に記録しました。昭和十六年に小学校を卒業して産業報国隊に応募して上京、東京郊外の通信機の工場で働いていたが、終戦の直前に工場が爆撃されて桑取へ帰ってきた。東京で母の弟と所帯を持っていた叔母が

も叔母に同情して面倒を見たり、幼い子らの相手をした。いつか同情が恋になり、十五歳年上の叔母と周囲の反対を押し切って結婚。十八歳で戸主となり二人の娘の父親になった……若い日の思い出から子育てや生活の苦

めました。その目には思い残したことを話し終えた安堵の色が浮かんだように見えました。それが長野さんと会った最後になりました。

手術の後のトラブルで苦しんだ四カ月の入院を終えた時には、長野さんのことをすっかり忘れていました。手術後一年経った翌年の八月一日に長野さんの夢を見ました。「あれはどうなった」夢枕に立った長野さんの言葉で、私は長野さんの宿題を思い出しました。忘れていた手帳を読み直してみると簡略な長野さんの人生記録ができそうでした。

私は四女で長野家を継いだ富岡の敏江さんと連絡をとり、米寿を越えて元気なお母さんからも補足説明を聞くことができました。病室の隣のベッドだったというわずかなご縁で、死後遺族に伝えたい思いを苦しい息の下で語ってくれた長野さんの言葉を一語も無駄にするまいと文章につづりました。

に一生住み続け、結婚する時に誓った妻と子のための「男の一分」を守り続けた清々しい一生でした。十六ページの小冊子を五部作りました。敏江さんが礼状をくれました。『忘れ残りの記』届きました。お忙しい中本当にありがとうございます。私の知らなかったことも多々ありました。早速仏壇に供えさせていただきますました。父も喜んでくれていることでしょう。初盆の記念に姉たちに渡したいと思えます。思いがけない市川さんとの出会いのお陰で父の思い出を残すことができました。孫子の代まで大切に伝えます——

**随想**

**忘れ残りの記**

上越保健医療福祉専門学校  
名誉校長 **市川 信夫**



二人の娘を連れて疎開していたが、叔父が戦死して行き場の無くなった未亡人に同情した母が自分の家に引き取った。自分

労話など、時々休んでは思い出し三日間でノート四、五ページの記録になりました。

手術の予定が決まったら内科から外科病棟へ移るときに挨拶すると、長野さんは何も言わずに私の手を握りじっと私を見つ

て、教えるという楽しさから離れると、今さらながら臨床医としての緊張感が恋しくも懐かしく浮かぶ思いを味わいます。そんな折、どんな縁か新しい仕事の声をかけてもらう機会がありました。

のは最高級のうれしさですが、唯一つ、家を離れて生活するのが不安でした。この幾年か、かなり重症な障害の身を（ヘルパーさんが入って時間的にずいぶん助けてもらっているとはいいえ）娘の献身的な介護に委ね、甘えできました。

と思います。生意気な口の利きようだと叱られそうですが、ボクは国立大の医学部を出ています。自分の力で入学し、卒業したように思い込んでいても、実際、医学部のボク等を教育し卒業させるごとに巨大な支出があつて、それ凡て、この社会が負担したはずです。身体がきく限りで自分を尽くすべきです。改めてそう感じます

# いのちある限り

— 楽しい介護を目指して —



お正月にツーショット

主婦 河村 一美

いま、いちばん輝いている女性——といえは本人は恥ずかしがるかもしれませんが、旦那様(英敏様)の在宅介護の合間をぬってサークル活動に忙しい。例を挙げると、随筆サークル「ふみの会」・「あわゆき組」・「上越詩を読む会」・「上越映画鑑賞会」、その他「高田文化協会事務局長」、上越市の審議委員も務めるとあれば、正に八面六臂の大活躍です。介護しながらの活動、彼女の短歌と文を通して、その気持ちと生き様にせまってみました。

●ちよつと庭へ出てくるからと出かければ夫の庭は町中全部  
●お父さん、お父さあんと追っかけてストーカーのように苦笑いする

夫の介護をはじめて三年半になります。いまの状態は、食事、入浴、トイレ、着替えなどはひとりでは無理の介護度4の認定を受け、週二回のデイサービス、月十日ほどショートステイを利用しています。会話は簡単なものを少し、テレビや新聞は全然分かりません。——何か食べたい・お

しっこしたい・愛してるといってくれ・キスしよう……ひとりであるのはこれくらいです。あと、私との掛け合いっこ。——トイレしてくれてありがとう・起きてくれてありがとう・眠ってくれてありがとう——笑いながらありがとうございます。そうすれば私も気分いいですから……。

「お父さん、私の名前、なんだったつけ……」  
「忘れたの。『か』つくよ」  
(考えている。私の顔をじっと見て)  
「か……ず……、かずみ

●ウイルスが脳に侵入した  
●ドラマでは感動的はずなのに集中治療室は孤独な地獄

発病は三年半前、帯状疱疹(ヘルペス)の菌が脳に入りました。六十一歳のときです。家を建て替えたり、いうことの聞かない妻がストレスを作って、それが発症の原因になったのかもしれない。健康に留意する人で、毎朝一万歩の目標で必ず歩いておりました。でも、

それは何のためだったのでしょうか。脳の海馬をやられ、記憶障害、性格不穏、そして認知症の症状が出ました。入院先の県立中央病院では集中治療室で生死をさまよったこともあり、幸いなことに体も丈夫で年齢もそんなにいいっていいことも含め、生命だけは取り留めました。

●うなされて管に巻かれたのたうってそれでも会社に行かなきゃとは点滴を引っこ抜いては叱られて監督不行き届きの私も同罪

救急で入った病院での一ヶ月は目も当てられませんでした。点滴や排尿の管をはずして毎日、看護士さんに怒られっぱなしでした。

そのあとすぐに病院を変えさせられました。つらい三ヶ月の入院生活は自宅介護を決意させるのに充分でありました。閉じ込められた病室での薬だけの治療も症状から見れば限界を感じさせ、それならば家族や近所の人たちと一緒に生活の方が良いのではと思ったのです。



骨折。ギブスの上から注意書き

夫は家から離れてデイやショートに行くのを嫌がり、不安だったので、どうか、私も付き添って行く手を握って離しません。そのくせ、足腰の丈夫な夫は夜など外に出たがって徘徊、大騒ぎになるので、夜の散歩で気を紛らわしたこともた

●そのたびにトイレはど  
●こだと聞く夫おむつを取ってああよかったね  
●在宅介護決めたわけた



身だしなみ。こうしていれば普通?

めない人ね」といわれます。夫と向き合っている時間はそれに集中し、後の時間は趣味やら友人とのコミュニケーションに励んでのびのび過ごします。

以前、介護施設に勤めていたことも幸いしています。施設の職員さんたちほどのように症状にに応じてお年寄りへ接しているか、知らず知らずのうちに学んだのでしょうか、人生、ムダはない……としみじみ思いました。

それでも私は夫と生きていく上で客観視できないものもあります。夫の早い老いは成人病を誘発します。手術や延命処置の場合も考えねばならないときもそう遅くはないと思うのですが、夫を可哀想という感情が私を覆いつくします。

びたびありました。

●陽あたり良好この個室鍵もトイレも格子戸も完備  
●洗濯物背負って小走り線路沿い隠れるように病院を去る

でも、目の離せない四六時中の介護は疲れまじす。ケアーマネージャーさんと相談、認知症認定を受け、デイサービス、ショートステイの利用を決めました。

よく友人たちから、「あなたはストレスのた

●夫の前では笑顔でいよ  
●う泣くのはひとりにな  
●つてから  
●大事なのはあなたの方  
●こそと労われて皆の言  
●葉に肅々となる

夫が発症して三年半、認知症の対応には慣れたものの次々襲ってくる合併症や骨折、それらを思うと夫は気力もなくなりました。それはすべてに悪影響を及ぼし、食欲がなくなり、歩き方もヨタヨタ、一気に十歳も老けた感じでした。

だひとつ妻の誇りをしめしたかった

私はそれら、夫と私の上に降りかかった不幸な事実をかなり冷静な目で捉えてきました。粗雑といふべきか、そんな医療機関の実態もつぶさに両眼で見、記憶に留めて置きました。

人とは、生きることとは、死ぬこととは……と、外側から見ている自分を感じます。介護短歌が生まれたのはザッパリと短い言葉の中に自分を生かす、そんな客観の世界がそこにある、と思ったからです。